



### 第3回研究会 2016年12月17日

英語指導研究会第3回の研究会が行われました。寒波が押し寄せて、大雪が降る中13名の先生方が参加してくださいました。青森市から4名の先生がまた、弘前市のALTの先生も参加してくださいました。いつにもましていろいろな先生が一堂に会し、非常に活発な研究会となりました。人数も初の10人越えとなり、少しずつではありますが、この研究会が成長していること、また、授業を少しでも改善しようという熱心な先生方が増えてきていることをうれしく思います。

そんな研究会の授業提案者は、弘前市立石川中学校の外崎聡先生です。教員歴12年で、現在の学校は学年1クラスずつで、3学年すべてを指導されています。また、隣に小学校が並置されていることで、小学校で授業をする機会があるなど小中連携についても熱心に実践されている先生でもあります。

### 授業者から

- ▶ 今日は飾らないいつもの授業を公開する。
- ▶ 普段から、発話の絶対量（＝生徒が英語を使う量）確保することに注意して授業を行っている。
- ▶ そのためには、教師自らが英語を使うことが必要だと考えている。
- ▶ 今回、ビデオを撮って授業を振り返ってみると、自分の英語力がまだまだであることを実感した。
- ▶ 今日研究会で話し合いたいポイントとしては
  1. 教科書の進め方：授業公開というと、いつも言語材料を扱って活動させるような授業が多くなってしまふ。普段なかなか花い合うことができない、教科書をどう料理するかという点について意見をシェアしたい。
  2. 訳、日本語の使い方、英語との割合：本文を扱う際に、「訳」はどうしているのか？みなさんの状況を知りたい
  3. 「書く」ことがどうしても苦手な生徒が多い。この点も多くの先生が苦勞されている点だと思うが、どのような取り組みや対策をされているのか聞いてみたい。

### 当日の流れと感想

#### 導入（インタラクションを通して前時の教科書の内容を復習し、本時の内容を導入する）

外崎先生は、教科書を生徒とのインタラクションを通して導入しようと試みておられます。ただ、その際に、どうしてもインタラクションにならず、教師が一方的に導入する、イントロダクションになってしまうことが悩みだと、お話になりました。このあたりをどうするかについて、参加された先生方から多くの質問と意見が出されました。

- ▶ 全体に質問を投げかけているが、指名してもいいのではないだろうか？

（授業者）

できるだけ全体を巻き込みたいということから生徒のつぶやきを拾いたいと思っているので指名はしていない。指名することはもちろんあるが、あまり多くしていないのが現状である。

割合としては、指名3：全体7くらいである。



- ▶ 中学生に「書初め」は身近ではないのではないかと。Do you like kekizome?と聞いても、返答が返ってきていないのはこれが原因だと思う。生徒の実態を踏まえて、書道をやっている生徒に個別に当てるほうが良いと思う。
- ▶ 生徒に笑い声があつてよかった。この段階ではイントロダクションになっても仕方がないと思う。例えば、Do you like kakizome?と生徒に質問を投げかけたら、Ask each other.と生徒同士で質問させ合う手法もあり得る。
- ▶ この「導入」の段階にどれくらい時間をかけているのか？

(授業者)

3～5分です。この段階をコンパクトにしてその次の活動にしっかり時間を割きたい。飽きさせないように時間をかけすぎないように留意している。

- ▶ 学力差について考えた。英語の授業では下位の子にしっかり対応することも大切だが、上位の子が飽きないように工夫することも非常に大切である。いかに上の子を伸ばしながら下の子を救うか？この点をどのようにしているか聞きたい。

(授業者)

テスト前に、勉強会を実施している。また、個別ではなくペア活動を取り入れるなどの対策をとっている。

- ▶ ペアの組み方に意図はあるのか？

(授業者)

英語の席順ということにはしていないが、学級の先生の考え方を尊重している。

- ▶ 生徒にいきなり WH で聞いても生徒はなかなか答えないものです。なので、質問を3段階に分ける工夫をしていました。

1. Yes / No で答えられるもの。Do you like kakizome?
2. A or B. Do you like Christmas or New year?
3. WH の質問 What do you do on the New Year's day?

### 展開（単語の導入から本文の内容理解）

外崎先生は教師が明示的な指導をすることなく、単語の意味や本文の内容を予想させることをねらっています。予習で単語の意味調べや本文の和訳をさせることもしていません。ただ、「単語の発音を生徒に教師役になってもらい、モデルを示す活動」が生徒には非常に不評でどうすればいいのかという問題提起がなされこの点について話し合いをしました。

- ▶ 生徒の発音が不完全であり、Let's see.が Let's she.になっている。これはしっかり訂正すべきである。
- ▶ (上の意見に対して) ただ、前に出てきた生徒の発音をその場で訂正してしまうと、その生徒に恥をかかせることになってしまう。そうならないための配慮として訂正しないほうがいいのか？



(授業者)

人前で話すことのきっかけとして行っている。自分で言ったことというのは頭に残りやすく、より深い定着につながると考えている。

- ▶ 予習をさせていないということだが、塾で勉強している生徒や英語が得意な子がいて、周囲の生徒が「予想」ではなく、できる生徒の発音を聞いて真似するだけということになる可能性があるのではないかな？
- ▶ フォニックスはやるのか？

(授業者)

やっていない。あくまで生徒の既習の知識を応用して発音と意味を推測させている。

- ▶ 発音の指導において、see と she の違いは大切である。生徒がよくやる間違いのひとつである。間違いにしっかり軽重をつけて、こういう大切な点については、たとえ生徒が間違えなくても押えること。あとに、同じように区別が必要な単語を例示するなどすると思う。教師は生徒が間違えやすい点をあらかじめ分かちおき、用意して授業に臨むこと。生徒が間違ってもそれはあくまで「想定内」という状況が大切である。
- ▶ 代表生徒に発音のモデルを示させるのは 1 つの方法であるが、非常にプレッシャーがかかる。事前にしっかりコーラスで練習させ、自信をもって発音できる状況を作っておくことと、終わった後に Good Job. と声をかけるなどの工夫があればいいのではないかな。

ここで、単語をどのように扱っているのか、みんなでシェアすることになりました。一言に「単語の扱い」と言っても十人十色でした。

- ◇ 虫食いのワークシートを使う
- ◇ 辞書を使う
- ◇ 次の時間に単語テストを行う
- ◇ テレビにイラストを提示し、単語をイメージとして習得させる
- ◇ 意味と発音をカタカナで書いたものを先渡しする
- ◇ カタカナのフリガナはだめ、Trouble はどうカタカナを振るのか？L と R の区別もつかない。必要な発音記号を指導するようにしている。これによって将来自分で勉強していける生徒を育てる。

次は本文の内容理解です。外崎先生は以下の流れで本文の内容理解を行っています。

1. 本文を聞かせる。(2回)
2. ペアになり日本語で本文の内容を確認し合う
3. Q & A (教師→コーラス)

ここでは主に「訳」の扱いについて議論がなされました。

- ▶ この活動の必然性について。この活動は「内容理解」ではない。「逐語訳」である。逐語訳とは、最終的な日本語の正確さなど、内容理解以外にも +アルファの能力が求められる。ここでは、多少不



器用でも、内容がざっくりわかるくらいでいいのではないか。

- ▶ 日本語訳は不要と言っている先生はたいてい家庭学習でやらせているものであることを忘れてはいけない。こういう面を見ないで、ただ「訳」はだめという議論は危険である。
- ▶ 最終的に「プロダクション」につながっていかなければ意味がないと思う。つまり、本文を理解したら、それにとどまらず、それを自分の英語として使うという段階である。こう考えると、訳は理解ではなく、「断片的な知識」でしかない。訳するだけでは、教科書の登場人物のキャラクターや会話から見えてくる「思い」のようなものまでは見えてこない。こういう見方ができて初めて「理解」したと言えるのであって、「訳」と「理解」は違うと考えるべきである。

### 音読とリプロダクション

外崎先生は、Chorus Reading→Buzz Reading→Partner Reading→Overlapping→Shadowing という手順で音読指導を行い、最終的に教科書本文の前半の単語を与えて、そこから本文全体を再現する形でリプロダクションを行っています。

- ▶ 元気に活動している。一年間の指導の成果が表れている。ただ、これをリプロダクションと言っているのかについては疑問である。もっとキーワードを減らして、絵を与えてそこから再現させる形でもできそうである。
- ▶ この形式では、「会話」になっていない。つまり、「会話の教材を」会話として扱っていないので、「会話」を生かしていない。子どもの負担を考えたときに、英語をプロダクトすることに加えて、話の流れを再現するという 2 重のものがある。ペアで会話を作らせてリプロダクション、一文の理解ではなく、会話の流れを生かしてリプロダクションなどもうちょっと上のレベルを目指してほしい。

### 全体を通して

- ▶ ペアなど発話量が確保されている。小学校でもいっぱい聞かせていっぱい話させるようにしているが、中学校の授業もこれと同じで安心した。小学生も 6 年生にもなると、「文字を読みたい」と言い出す子供が多くなるが、その時には「予想」して読ませるようにしている。外崎先生の授業は、こういう意欲を拾って生かす授業であった点にも感心した。ただ、中学生の指導であるので、「英語らしさ」をもっと意識させたい。細かいところを丁寧に指導するべきである。生徒のいいパフォーマンスを取り上げて褒めてあげることが、彼らの成功体験につながり、自信となる。代表で生徒に英語を読ませるのは、偶然ではなく机間指導の時うまく読んでいた生徒に当てるなど、必然で行ってみてはどうか。
- ▶ 中学校は小学校と違って定着が求められる。その定着と楽しんでやる活動が隣り合わせであり、中学校の先生はいろいろな工夫をされながら授業をされているのだと感心した。
- ▶ フォーマルな研修会では、なかなか率直に意見を言い合うことができない。また、毎年、研修会の時期が一緒なので、扱うレッスンも毎回同じである。こういう「普段」の授業、しかも「教科書」を扱う授業を見ることは大変ためになった。
- ▶ Can you swim?はいいが、Can you run?はおかしい。なぜならみんな走れるからである。こういう場



合には、Can you run fast?のような修飾語句をつけるなどしなければ自然な英語にならない。小学校でも扱うことが多いCan だからこそ、扱う英語や教材を批判的な目で見ることが大切である。

### おわりに

今回は、非常に活発な意見交換がなされ、あっという間の2時間半でした。それでも参加者の先生はまだまだ話したりないようでした。そのくらい本気で授業について語れることは、普段の授業をなあなあで流さず、問題意識をもって授業をされている証拠だと思います。そんな熱心な先生同士、意見交換することが、指導力の向上につながることは間違いありません。

外崎先生は、学級と教科指導のほかに「部活」「分掌」、さらには、弘前の英語授業研究委員など多くの仕事で、お忙しい中、授業を公開してくれました。授業をオールイングリッシュでやっっているが、「英語の間違がある」と言っている割に、参加したALTに「英語が上手だ」と褒められておりました。また、「まな板の鯉になるのはなかなかないから緊張するな」と言っていましたが、最後には「こんなに自分の授業を丁寧に見てもらえて、とてもいい勉強になった」と話してくれました。研究会を運営する側としてはありがたい限りです。今回の研究会から得られたものをもとに、授業を数段パワーアップするのだろうと確信しています。外崎先生ありがとうございました。

(文責 佐藤)